帰国隊員報告会
～当たり前にしていた「大切さ」を実感できた 2 年間～

齋下　徹
（17－1，パラグアイ，養護，静岡県立御殿場養護学校）

どうもはじめまして。昨年 3 月末にパラグアイから帰ってきました現在静岡県の御殿場養護学校というところで、高等部に所属しております。行くまでは小学生と 3 年間一緒に勉強してきたんですけれども、この経験を少し話させていただきたいと思います。この職業やりながら、人前で話すのが苦手なものですから、原稿を丸読みさせてもらいます。

はじめさせていただきます。私は平成 17 年度 17 年 1 月から平成 19 年 3 月まで養護隊員として南米パラグアイに派遣されておりました。協力隊に参加した理由はいくつかありました。学生のころから発展途上国といわれる国々を旅行することが好きで、いつか機会があればそのような国々で何か活動することができたらと思っていました。同時に自分の職業、特別支援教育においてもっとも必要な資質はコミュニケーション能力だと常に思っております。が、採用されてから 3 年間主に発達障害や知的障害を抱えている子どもたちと接しながら、果たして自分は彼らの気持ちを本当に理解できているのか、彼らの気持ちになった立場で指導・支援できているのかと疑問に思うようになっていました。そのような折、この現職教員特別参加制度を知りました。自閉症の子どもたちは、言語の違う国に 1 人おかれている状態とよく言われます。私もそのような状況に身をおくことで、どんな気持ちで子どもたちが過ごしているのかを、少しでも理解できるのではと考え、自分の資質向上のため迷わず参加を申込みしました。

まず、私が赴任したパラグアイについて少し説明させていただきます。パラグアイは南米大陸のほぼ中心にあります。国土の広さは日本とほぼ同じです。公用語はスペイン語、もともとの原住民が使用しているグアラニー語です。しかし田舎になればなるほどグアラニー語だけの使用率が高く、スペイン語が話せなくなります。主産業は農牧民業です。薬草に水やお湯を注いだテレレもしくはマテと言われる飲み物をみんなで丸くなって飲みながら雑談をする習慣があり、そのためか、みんなのんびりしていておしゃべりが大好きです。約 70 年前に日本からの移住者が現在のパラグアイ産業の礎を築いたため、南米の中でも特に親密国です。パラグアイの常に大きな問題としては、貧困問題があります。また、貧富や都市と地方格差が著しいことも重大な問題です。

続いて、パラグアイの特徴的な教育事情について、少し説明させていただきます。教育制度としては、5 歳から 14 歳が義務教育での基礎教育、15 歳から 18 歳の中等教

育になっています。しかし基礎教育段階から進級制度があるため、留年や中退率も高く様々な問題につながっています。特殊教育に関しても約 50 年の歴史があります。しかしながら、現状は特殊教育を学べる機関が極端に少なく、特殊教育に携わっている教員のほとんどが障害への知識や配慮を欠く教育活動が行われているのが現状です。私の配属先も他に漏れず同様でした。私の配属先は、首都アスンシオンから 60 キロほどのパラグアリ県パラグアリ市の町外れにある、この上ない希望という意味のディビナ・エスペランサー特殊教育センターという教育文化省管轄の施設でした。私が赴任した 1 年前、日本の草の根無償援助を受けて建て直し、規模を拡大したところでした。ディビナ・エスペランサーの授業内容は、地域に住む知的、肢体不自由、視覚、聴覚などを抱える子どもや中学校に通う特別な支援を必要とする子どもへ適切な教育支援を行ったり、また障害を抱える未就学児に対し早期教育を行ったりもしています。日本でいう学校と地域教育センターを兼ね備えたような施設で、すでに 60 名ほどが在籍していました。ここでの私の特定内容は、障害についての知識や指導技術が乏しい全教員へのスキルアップと、同時に子どもたちへのスキルアップでした。しかしながら赴任当時の参観期間を通し、次にあげられるようなハード、ソフト面双方において、大きな日本との違いに気付きました。特に、特別な教育支援を必要としている子に対し、視覚的教材をまったく使用しない、普通学校と同様の黒板を写すだけの授業にものすごく戸惑いを感じていました。はじめはこの現状で何から手をつけたらよいかまったく分からず、また限られた時間の中で要請内容のように学校全体を変えていかなければならないという勝手な使命感が私にはありました。それが生徒なり同僚への不満や憤りばかりにつながっていました。しかしある日まわりへの憤りを先輩隊員に漏らすと、仕方ないよ、先生方には責任は無い、彼らも同じように教わってきたのだから、と言われ、はっとしました。まさにその通りでした。また、教員の技術力や意識の低さには日本とは違う背景があるからであり、もし自分がそのような境遇になったとき、果たして彼らと異なるかと言えば正直同じだろうということにも、その言葉から気づく事ができました。そしてそのような遠いところばかり見てるばかりでは何も始まらない、まず足元から、自分のできることから始めていこうと思い直しました。ここから私の事実的な活動が始まったと思います。まずは、午前、午後とも各一学級に入り、直接生徒を担当させてもらいました。その授業では指導を実体験することを通して、徐々に現状や問題をふまえた上での切り込みを探っていきました。それらの活動を通じ、問題と考えられる点は次のような 3 点が考えられ、それぞれにアプローチをしてみました。１、教員の障害特性に対する知識が乏しいこと。２、特殊教育に適した授業方法を知らないこと。さらには特殊教育により必要な教材の知識と教材作りに必要な資金を出せない現状、などでした。

1 に対しての支援方法として、講習会などで伝えていくことを考えました。配属先の教員や校長からの要望と自分の考えが合致し、赴任 6 ヵ月後から定期的に講習会の機会を頂き、次のような内容の講習会を行いました。すべての講座において障害に関

しての難しい専門知識は避け、障害者への接し方として最低限必要な知識や、知的障害者に対しては言葉よりも視覚的なアプローチが必要ということを実体験を通して感じてもらう演習を取り入れるなど、内容も工夫することを常に心がけました。体育のときは体育隊員に協力を要請し、彼女の専門分野である楽しくできる全身運動のアイデアと私の専門分野である障害児体育での体育など実践を踏まえて紹介しました。赴任１年が経過するころから、配属先以外での講習会をやらせていただく機会を何度も頂き、各地の教員養成学校の学生、現職の養護学校、小学校、幼稚園などの教員などを対象に広く知ってもらうために行ってきました。

２に対しての支援方法として、特殊教育に必要不可欠な要素を含みながらもこちらの現状に沿った授業方法を確立すること、そして確立後はそれらを教員に啓蒙していく活動計画を立てました。午前のクラスの生徒は重度から中度の生徒たちを担当し、一斉ではなく個々にあった課題ができるような体制や方法を実践し教師に紹介しました。あわせて日常生活の指導方法も実践し、教師や保護者に紹介しました。午後は知的に軽度の生徒や普通学校で進級できない生徒のいるクラスで一斉授業のスタイルづくりを目指し、活動しました。担任と一緒に授業内容や方法を考えながら、教材の使い方などは自分が準備、アドバイスをし、授業は実際に担任にやってもらうような授業形式で行ってきました。これらの授業を模索し続けていくうちに、子どもたちの理解の様子から次の要素を盛り込んでいけばいいことが分かり、授業スタイルが確立されていきました。A、視覚的な教材を必ず用いること。B、座っているだけでなく黒板の前などに出て操作的なものを行ったり動きのあるものを取り入れること。C、子ども自身が考える時間を必ず設けること。C に関してはやり方はいろいろあると思いますが、私が行ったのは黒板を写して終わってしまうのではなくその時間をより多くの問題に取り組めるようにこのようなプリント学習を行ってきました。あと、同じ単元内容を最低 3，4 回は繰り返すことなども心がけて行いました。これらの授業スタイル確立後は先ほどの講習会などで、全体に対してこのスタイルの紹介と、定着と練習のためこれらの要素を必ず盛り込んだ模擬授業の組み立て、発表をグループごとで行い全体で評価しあう研修の機会を何度か設けました。この研修体制のもう１つの目的は、各教員の授業方法の引き出しを広げることにもありました。

3 に対しての支援方法として、廃材で作れる教材の開発と紹介を考えました。ダンボールや生活廃材を使った教材を開発し担当生徒と実践活動を通して紹介したり、同じく共通の課題を解決するための教材をグループごとで話し合い、作成、発表、評価しあう機会を設け、教員の教材作りのスキルアップを図りました。さらには任期終盤で職場にパソコンが 2 台導入されたため、パソコンを利用した教材作りができるような技術向上を全教員対象に個々に行いました。次第に私の教材を借りたいという教員が増えたため、貸し出しのシステムを作りました。教材はこのように教科ごと単元ごとに整理し、貸出票を作りその管理を図書室の司書員に頼みました。さらには今までの講習会、プリント学習、そして教材のデータすべてをパソコンに保存して、いつで

も教員ができるようにしました。

これらの活動を通じての成果ですが、１、授業に教材を使う教員の増加。自分で操作的視覚的教材をまねして作ったり授業で使ったりしようとする試みが見られるようになりました。また、私の教材を多くの先生が利用してくれるようになりました。２として教員の意識の変化。1つの例を紹介します。この写真は2年目の任期終盤に行われた学習発表会の練習のようです。マスゲーム演技で体育教員が言葉だけの指示を行い続けて子どもたちがなかなか理解できないでいるのを見かねた教員数名が、彼らの左手首にリボンを巻きこちらの手から上げればいいんだよ、と指導していました。以前には見られなかった活動が教師自身から出てきたことが大変うれしかったことです。３、子どもたちの能力向上。視覚的な教材を授業で使うことで子どもたちが理解でき、課題をクリアできました。またそのような教材や手立てをしたことによって、子どもたちが能力を伸ばせることを教員に対して立証することができました。

1年9ヶ月の活動を通して、自分の活動が配属先やパラグアイの問題の根本的な解決につながったと言えば必ずしも言えません。でも大きなことはできなかったですが、多くの同僚が私に最後に言ってくれたように新しい視点を投じることができたと思っています。同時に私自身も多くの視点をこの活動を通して持てるようになったと思います。日本では気付けなかったこんなにたくさんのことを学ぶことができました。志望動機の1つでもあった子どもの気持ちが痛いほど理解できました。分からない言葉で次から次へと指示されて右往左往しているとき、言いたいことがあるのにそれをうまく伝えられないとき、子どもたちはきっとこんな状況下でこんな気持ちでいつもいるのだろうなと思えるようになりました。パニックになる気持ちも理解することができました。今では自分が以前より子どもの気持ちにそった姿勢や伝え方ができるようになったと感じています。また海外での活動を通して、双方の国の良い点、悪い点に気付くことができました。とりわけ以前は気付けなかった日本のよさに気付けたことは私にとって大きな収穫でした。以前日本にいたときは、正直日本という国を好きになれませんでした。自分の国に対して誇りというものを持てない自分がいました。教育に対しても同様です。比較的批判ばかりされる日本の教育でよいところを見出せないでいるのが現状だと思います。以前の私もそうでした。でも日本の教育の質の高さ、教員の意識、指導力の高さなどすばらしさを実感することもできました。もちろんその現状に甘んじてばかりいてはいけないと思いますが、教師自身が日本の教育の悪いところばかりでなく良いところも自分たちで実感して、もっと自信を持っていいのではないかと感じることができるようになりました。同時に以前は面倒くさいと思っていた教員の研修ですが、その制度自体があることやまた私たちは教材を手作りするとき教材を買ったら事務に請求し使った分がしっかり返金されます。その体制が保障されているからこそ私たちは子どもたちのために教材を作ることができることなど、今まで当たり前すぎてありがたみすら感じることができなかった日本のさまざまな教育体制に気づくことができ、今では本当にありがたく思えるようになりました。

最後に、未だ日本の教育界に自分のこの経験を十分還元できてるとは言えません。でも、今後の教師人生において必ずプラスになる経験をさせてもらったと思っています。この機会を下さった多くの方々に本当に感謝したいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。